

聖書箇所：コリントの信徒への手紙一 4章6～13節

○4：1～5で、福音宣教者としての自分および同労者が、「キリストに仕える者、神の秘められた計画をゆだねられた管理者」として、唯一の有効な裁きである神の裁きの前にのみ立ち、他の一切の人間の判断には左右されないことを断言したパウロ。パウロを初め福音宣教者を裁くのはあくまでも主であり、終わりの日に「主が来られるまでは、先走って何も裁いてはいけ」ないのである。しかし、実際のコリント教会の状況はどうだったのだろうか。今回の聖書箇所(6～13節)で、パウロは感情的にもなりながらこれを厳しく指摘していく。そして「こんなことを書くのは、あなたがたに恥をかかせるためではなく、愛する自分の子供として諭すためなのです」、「わたしに倣う者になりなさい」と、教会が本来あるべき姿に立ち帰るように、さらに感情をむき出しにしながらコリント教会の人々を懸命に諭していく(14～21節)。

【注解】

- 「兄弟たち、あなたがたのためを思い、わたし自身とアポロとに当てはめて、このように述べてきました。それは、あなたがたがわたしたちの例から、『書かれているもの以上に出ない』ことを学ぶためであり、だれも、一人を持ち上げてほかの一人をないがしろにし、高ぶることがないようにするためです。」(6節)
- ・「わたし自身とアポロとに当てはめて、このように述べてきました」の「このように」とは、単に1～5節までの部分ではなく、3：5～17を中心に神の僕、福音宣教者について述べてきたことを指している。つまり、
- パウロは福音の種を植え、アポロはそれに水を注ぐ役割を果たした。またパウロはイエス・キリストという土台を教会に据え、その土台の上にアポロらは人々の信仰という家、建物を建てている。しかし、あくまでもこうした宣教の主体は神様であり、福音宣教者はこの神様のために力を合わせて働く者に他ならない。そして、こうした福音宣教者を評価するのはあくまでも神様であられる。誰も「主が来られるまでは、先走って何も裁いてはいけない。
- ※コリントの教会の人々のためを思い、「わたし自身とアポロに当てはめて」、上記のことを自分は述べて来たパウロは言う。「それは、あなたがたがわたしたちの例から、『書かれているもの以上に出ない』ことを学ぶためであり、だれも、一人を持ち上げてほかの一人をないがしろにし、高ぶることがないようにするため」であった。
- ・「書かれているもの以上に出ない」
- この格言の出典は分からないが、神様の絶対的主権を教える聖書全体の文脈を越えるようなことをしないという意味だと思われる。

パウロはこうした格言を引用し、神様の絶対的主権と神様の裁きの事実の前に自らの分を弁え知り、高慢から解放されることをコリントの教会の人々に要求する。

- ・「一人を持ち上げてほかの一人をないがしろにし、高ぶる」

→これが実際にコリントの教会に蔓延していた状況であった。パウロはここで自分が具体的にされた中傷、特に雄弁なアポロと比較してなされた中傷を思い出しながらこの文章を書いているように思われる。しかし、コリント教会の人々のこうした行いは、結局のところ自分の物差しで神の僕である福音宣教者を判断できると考えて、神様の裁きと主権を蔑ろにすることに他ならなかった。実に高慢というのは、神の主権に対する反逆、挑戦以外の何ものでもないのである。

○「あなたをほかの者たちよりも、優れた者としたのは、だれです。いったいあなたの持っているもので、いただかなかったものがあるでしょうか。もしいただいたのなら、なぜいただかなかったような顔をして高ぶるのですか。」(7 節)

- ・ここでパウロは高慢の問題をさらに掘り下げていく。ここで問題にされているのは、神様からいただいた賜物である。賜物の源は神様であり、他でもない神様がコリント教会一人ひとりに賜物を与え、「優れた者」としてくださったのである。しかし、コリント教会の人々はその賜物を神様から「いただかなかったような顔をして」、つまり自分で獲得した賜物だと考えて高ぶっていた。コリント教会の人々の高慢のたちの悪さがここにあった。
- ・さらに言えば、神様がそれぞれに賜物を与え、他の人々と異なる優れたところを各自に与えてくださったのは、キリストの体である教会全体の中で各自が異なる賜物を持って互いに仕え合うためだったのである。しかし、コリント教会の人々はそうした全体の中の個としての位置も忘れてしまい、自分が獲得したと思い込んでいる個人の賜物を誇りにして、他の人々の賜物を蔑み、裁き合うということすら行っていた。こうした高慢をもパウロは鋭く批判する。

○「あなたがたは既に満足し、既に大金持ちになっており、わたしたちを抜きにして、勝手に王様になっています。いや実際、王様になっていてくれたらと思います。そうしたら、わたしたちも、あなたがたと一緒に王様になれたはずですから。」(8 節)

- ・これはパウロの痛烈な皮肉の言葉。ここで意識されているのは、キリスト者、教会に与えられた終末の希望の絶大さと現実の戦いの激しさを見失った人々と思われる。彼らは終末の希望、その約束が既に成就したと考えて、その希望を来らせるための現実の戦いを全く放棄し、放銃主義に陥っていた。パウロはこうした人々の様子を、「既に満足し、既に大金持ちになっており、……勝手に王様になってい」と指摘する。
- ・パウロの思想

→将来の復活の希望のために、今キリストの苦しみと死に与り、戦いつつ生きる。

「わたしたちを抜きにして」とは、こうしたパウロの思想に基づき、現にパウロたちが体験している生き方とは関係なくという意味。

- ・実際はキリスト御自身が示され、使徒たちもそれに従ったように、常に僕として生き、将来の希望を仰ぎ見て今を戦っていかなければならないのだが、その今の責任を無視して「勝手に王様になって」やりたい放題に走っていた人々がコリントの教会にはいたのである。
- ・こうした人々をパウロは、「いや実際、王様になっていてくれたらと思います」と皮肉をこめて痛烈に批判しながら、諭す努力を続けていく。

○「考えてみると、神はわたしたち使徒を、まるで死刑囚のように最後に引き出される者となさいました。わたしたちは世界中に、天使にも人にも、見せ物となったからです。わたしたちはキリストのために愚か者となっているが、あなたがたはキリストを信じて賢い者となっています。わたしたちは弱い、あなたがたは強い。あなたがたは尊敬されているが、わたしたちは侮辱されています。今の今までわたしたちは、飢え、渇き、着る物がなく、虐待され、身を寄せる所もなく、苦勞して自分の手で稼いでいます。侮辱されては祝福し、迫害されては耐え忍び、ののしられては優しい言葉を返しています。今に至るまで、わたしたちは世の屑、すべてのものの滓とされています。」

(9～13 節)

- ・これまでコリント教会の人々の状況について語ってきたパウロだが、ここからパウロはそれと比べるように使徒としての自分たちの姿を語っていく。そして、「考えてみると」何とも自分たちは割の合わない役回りを強いられていると告白する。
- ・「神はわたしたち使徒を、まるで死刑囚のように最後に引き出される者となさいました。わたしたちは世界中に、天使にも人にも、見せ物となったからです。」(9 節)

→当時のギリシア・ローマ世界では、円形劇場での見せ物の最後に死刑囚が登場し、お互い同士、あるいは剣闘士や獣と戦わされるという残酷な習慣があった。パウロは自分たち使徒の生き方をこの死刑囚に例え、自分たちは命の危険にもさらされながら宇宙的規模の天下の笑い者とされていると、その苦難を告白する。

cf. コリントの信徒への手紙二 11 : 23～28

- ・「わたしたちはキリストのために愚か者となっているが、あなたがたはキリストを信じて賢い者となっています。」

→パウロはキリストにあって賢い者となるために、この世の基準では愚かとうつつるイエス・キリストの十字架の福音を信じ、これを宣べ伝える者となった。しかし、コリント教会の一部の人々は、自分の小賢しい知恵を誇りとし、既に満ち足り、豊かになっている者として「賢い者」を自認していた。パウロはこれを痛烈に皮肉る。

・「わたしたちは弱い、あなたがたは強い。」

→パウロの論敵たちは彼について「弱い」と批評し、自分たちの方が強いと誇っていたようだが、それはあくまでも見せかけの強さに過ぎない。パウロはそんな人間的な強さをひけらかすよりも、自らの弱さを通して神の力が現わされるのをよく知っていた。

cf. コリントの信徒への手紙二 12 : 9

・「今の今までわたしたちは、飢え、渇き、着る物がなく、虐待され、身を寄せる所もなく、苦勞して自分の手で稼いでいます。」

→このようにパウロは、自分たち使徒が経験したこれまでの闘いの生活をリアルに語る。

・パウロはテサロニケ、コリント、エフェソで「自分の手で」働き、「稼いで」生活を支えた。これはユダヤ人としてのパウロにとっては当然のことだったわけだが、肉体労働を奴隷の為す卑しい仕事とする労働観を持っていたギリシア人には理解が困難だっただろう。しかし、パウロはこのように自ら肉体労働に従事しながら福音宣教に当たって苦闘する様子をここで描く。このように苦闘しながら福音宣教に従事してきたパウロが身に受けているのは侮辱、迫害、ののしりに他ならなかった。しかしそれでもパウロは「祝福し」、「耐え忍び」、「優しい言葉を返」す。それはイエス様も教えられていたことであり (cf. マタイ 5 : 38~48、ルカ 6 : 27~36)、こうした生き方こそパウロが教会に求めるものだった。

・「今に至るまで、わたしたちは世の屑、すべてのものの滓とされています。」

「世の屑」は「清潔にするときに除去されるもの」を意味し、「人間の屑、やくざ者、ろくでなし」といった罵倒の言葉だが、そこには同時に「どこもかも潔める」という原意から「宥めの供え物」という意味も含まれていると聖書学者の岩隈直は解釈する。同様に「すべてのものの滓」も「汚物、垢」といった罵倒の言葉だが、「至るところ綺麗に拭き取る」という原語から「宥めの供え物」という意味も含まれていると言う。そうであればパウロはここで、自分たちはこうした罵倒の言葉を浴びせられていると自己卑下して嘆きつつも、それでも自分たちは自らを犠牲にしながらイエス・キリストの福音を宣べ伝え、神様と人を和解させる任務を与えられた者、すなわち「宥めの供え物」としての役割を果たしているのだと自負の気持ちを込めていることになるだろう。

【今回の聖書箇所から思うこと】

○今回の聖書箇所を読んで、「既に」と「未だ」の緊張関係を改めて思わされた。

キリスト者は将来の救いを「既に」与えられている。しかしそれは未だこの世界に成し遂げられていない。この緊張の中をキリスト者は生きなければならない。この意味でキリスト者は確かな将来の希望を仰ぎ見ながら、今の不完全なこの世界を変えていくべく苦闘していく存在と言えるだろう。そのため、将来の救いの希望ばかりを語って今のこの世界の責任をないがしろにすることは教会として許されていないと思う。